

# 人や道具を表す英語の接尾辞について\*

太田 聡

## 1. 序

本稿では、人や道具を表すために付加される代表的な派生接尾辞を取り上げ、その特徴や規則性などについて所見を述べていく。また、第3節以降では、特に -or が示す特性について議論し、そこから窺い知ることができる派生のメカニズムについて述べ、さらに、全体的な過程の見取り図も示してみたい。

## 2. 人・道具を表す接尾辞の代表例

本節では、人や道具を表す名詞を作り出す英語の接尾辞の代表例の使われ方などを、Quirk et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language* から原文を引用する形で紹介しながら、それらに関連する疑問点や気づきなどをコメントしていく。

(a) **-ESE**: 'member of' (nationality or race), as in *Chinese, Portuguese, Japanese*.

(op. cit. 1552)

この -ese という接尾辞が付いた例は、ヨーロッパ人を指すものとしては Portuguese と Maltese くらいしか思い付かないが、アジアの国々の人を指す場合には、Chinese, Japanese, Taiwanese, Javanese, Vietnamese, Burmese, Siamese, Bhutanese, Nepalese, Ceylonese といった具合に、多数挙げることができる。おそらくこの -ese には差別的ニュアンスがあり、欧米人のアジア蔑視の意識が、アジア人の呼び方として -ese が多用されていることに反映されているように思われる。

明治時代の美術界の指導者岡倉天心は、幼い頃から英語に慣れていて堪能であり、*The Book of Tea* などの英文の本をニューヨークやロンドンの出版社から出版しており、また、ボストン美術館東洋部長も務めた。この天心にまつわる以下の有名なこぼれ話からも、アメリカ人にあった差別意識を感じ

取ることができる。

「1904年、天心はボストン美術館から招聘を受け、横山大観ら門下生を伴って渡米した。そして、羽織袴に雪駄履き姿で一行が街中を歩いていたところ、ある若者に “What sort of 'nese are you people? Are you Chinese, or Japanese, or Javanese?” と冷やかし半分に声をかけられた。この無遠慮な問いかけに対して天心は、くるとその質問者の方を向き、 “We are Japanese gentlemen. But what kind of 'key are you? Are you a Yankee, or a donkey, or a monkey?” と流暢な英語で言い返し、歩み去った。」<sup>1</sup>

アメリカ人の若者の問いが、東洋に対する偏見に満ちあふれた侮蔑の台詞であったからこそ、天心はとっさに、アメリカ人を指してしばしば軽蔑的に用いられる Yankee と、「ばか者」も意味する donkey と、「いたずら小僧」も意味する monkey を混ぜて、つまり、韻を踏んでいるだけでなく、意味的にも皮肉たっぷり、切り返したのであろう。感嘆すべき天心の英語力をもってした、日本人にはまさに胸がすくような逸話である。

(b) -(I)AN: ‘adherent to’, as in *Darwinian, republican*;

‘citizen of’ as in *Parisian, Indonesian, Chicagoan, Glaswegian* (of *Glasgow*).

(ibid.)

前述のように、-ese には蔑みの含意があると言えるが、逆に、-(i)an には一種の優越感を感じ取ることができるかもしれない。例えばフランス語では、「(パリ人に比べれば)田舎者」という気持ちがあると、(-ien(ne)ではなくて、)-ais(e) (= -ese) が用いられる: *Parisien(ne)* vs. *Marseillais(e)*, *Lyonnais(e)*, *Newyorkais(e)*。ちなみに、上掲例で *Indonesian* に *Parisian* と同じ接辞を使っているのは、尊敬の気持ちの表れというよりも、-ia で終わっていたから -ian とする方が楽だったのだらうと推察できる。

(c) -IST: ‘skilled in’, ‘practicing’, as in *violinist, stylist, rac(ial)ist, masochist, Calvinist, socialist, loyalist*.

(ibid.)

この -ist に関連して、疑問に思うことなどを3点述べてみる。まず、rape という語から人を表す名詞を作る場合、なぜ -er ではなく -ist が選ばれるのであろうか (つまり、なぜ rapist であって raper ではないのであろうか)。

violinist や cellist では、日々練習を重ねてこそそう呼ばれるに相応しい人になるわけである。が、rapist の場合には、そのような日々の積み重ねなどと関係あるとは思えない。たとえ初犯者であっても rapist のはずである。ならば、-ist の表す意味とそぐわない形をわざわざ採用せずに、単純に raper とした方がよいのではなからうか。

次に、言語学の各分野の専門家を表す語を例に、-ist と -ian の使い分けを考えてみたい。例えば、syntax や phonetics を研究する人は syntactician, phonetician と -ian を付加して表すことが一般的である。一方、phonology や morphology を研究する人には -ist が選ばれ、phonologist, morphologist となる。これらはどのような基準で区別されているのであろうか。1つの可能性として、形容詞にしたときに -ic 型になるものは -ian を、-ical 型になるものは -ist を取る、という対応関係があるのかもしれない。つまり、syntactic, phonetic vs. phonological, morphological という具合に通常用いられる形容詞形が異なることが、1つの目安になりそうである。しかしながら、semantics や linguistics の形容詞形としては semantic, linguistic が用いられることが多いが、それを研究する人は semanticist, linguist と表すのが普通であり、さらに、grammar の形容詞形は通常 grammatical であるが、文法学者は grammarian となり、上の推測とはむしろ逆の結果になる。よって、この -ian と -ist の選択は、本稿では未解決の問題として残すしかない。

3つ目の気になることは、派生語というのは意味も形も付け足すことが普通である（例えば、「『playする人・もの』は player」となる）のに、「なぜ linguistics をする人が linguist という具合に短くなるのか」ということである。これはおそらく、linguistics には“ist”という音（綴り）が既に含まれているので、そのまま -ist を付加しては同音が繰り返されるため、重複部分の削除が起こり、結果として、派生語の方が短くなったのであろう。このことは、例えば、-ate で終わる語に -ation を付加する際に、重複箇所が削られることと同じと思われる（例：decorate + ation → decoration）。

- (d) **-ER, -OR:** forms agential nouns, as in *singer, writer, driver employer*, etc; used informally also with phrasal verbs (*washer-up, chucker-out*) and with object-verb compounds and some comparable compounds (*window-cleaner, high-flier*). Agentials may also be nonpersonal: *silencer, computer, thriller*. With neo-classical bases, the suffix is often spelled -or (*accelerator, incubator; supervisor, survivor; actor*); so too

in cases where there is no free base (*author, doctor, etc.*). (下線は筆者)

(op. cit. 1550)

この -er は、人——特に動作主 (agent) ——を表す最も典型的な接辞である。しかし、問題なのは、-er と -or の使い分けである。下線を引いた箇所のように、古典語への復帰運動の一環として、新しい事物の命名をする場合には、ラテン語やギリシャ語の語幹や接辞を用いた新造語が作られた。このことは、同書の以下の言説でより具体的に触れられている。

From the Renaissance to the early twentieth century, English word-formation, like English (or for that matter European) architecture, was dominated by neo-classicism. The vocabulary was augmented by borrowing and adaptation of Latin and Greek words, or, as time went on, by the formation of words in English-speaking countries according to the Latin and Greek models. The habit of neo-classical formation still flourishes in certain learned areas of vocabulary, particularly in the natural sciences.

(op. cit. 1522-1523)

しかしながら、ラテン語などから取り入れた語の場合には、-er ではなく、-or が使われやすいとするだけでは、「個別に暗記すべし」と言われているようなものであり、法則が示されているとは言い難い。そこで、どのような語には -or が付加されるのかという基準や条件を求めて、次節以降で検討していくことにする。

このほかに人を表すものとしては、以下のような接尾辞があるが、本稿では、これらについて特に言及することはない。

- (e) **-ANT**: a chiefly formal agential, as in *inhabitant, contestant, informant*; it often corresponds to verbs in *-ate*: *participate* ~ *participant*, *lubricate* ~ *lubricant*.

(op. cit. 1550)

- (f) **-EE**: 'one who is object of the verb', as in *appointee, payee*; in some cases, as with *-ant*, it may replace the verb ending *-ate*: *nominee*.

(ibid.)

### 3. -OR の選択について

#### 3. 1. はじめに

私事ながら、今から6, 7年前、当時高校生だった息子に、「父さん、どんな語が -er じゃなくて -or を取るの？ 父さんは語形成にも詳しいのなら、知ってるでしょ」とプレッシャーのかかる質問をされたことがある。そうしたことは少し詳しい文法書でも見れば直ぐに分かるはずだと思ったのだが、いかんせん、納得できる答えを見つけ出すことができなかった。そのときの悔しさが心に残っていたことが、-or について調べてみるきっかけとなった。

例えば、ヨーロッパの言語について習い始めると、女性名詞と男性名詞などの区別がどうしてできるのか、と不思議な気がするものである。しかし、そこには案外簡単な手がかりが存在するのかもしれない。例えば、ラテン語では -a で終わると基本的に女性形 (feminine) である。よって、フランス語でも、la tempura(天ぷら) のように、母音で終わると女性名詞扱いになりやすい (ただし、「漫画／マンガ」は le manga)。また、イタリア語やスペイン語でも女性名詞は -a で終わるものが多い。以下の映画の台詞の例では、警察官が女性というのではなく、「警察」という語がイタリア語では女性扱いされているのである。

Joe: This is not my problem, see? I never see her before. Hah! OK.

Driver: Is not your problem ... is not my problem. And ... and ...

What you want? You don't want girl, yeah? Me don't want girl.

Polizza! Maybe she want girl.

☆ **Polizza:** (*Italian*) *Police*

[睡眠薬のせいで酔っ払ったように見える王女様の扱いに困り、  
「警察に引き取ってもらおう」と提案している場面]

“*Roman Holiday*”より

ロマンス系でなくても、例えばドイツ語の場合でも、男性形 (masculine) と女性形の区別は、無意味語であっても自然となされるそうである。となれば、それを可能にしている認知的な何かがあるはずである。

そうであれば、英語の -er と -or の使い分けにも、特別語源に詳しくない人でも分かるような、単純な基準があるはずだと考えてもよからう。

#### 3. 2. 本節の主な目的

動詞または名詞に付加して動作主 (あるいは、道具や居住者など) を表

す名詞を作る接尾辞として、最も一般的・生産的なのは、driver, heater, Londoner などに見られる -er である。しかし、actor, conductor, percolator などのように -or が付加して行為者や道具を表す例も多く存在する。そこでこの第3節では、どのような語に対して -or が選ばれやすいのかという法則性を探っていくことにする。そして、語源的・歴史的な観点のみから答えを求めるのではなく、どのような形態的・音韻的特徴を（現在）備えている語に -or が付加されやすいのかを考察することを主眼とする。さらに、-or の特殊性や -er との振る舞いの違いが、形態論の仕組みに対して与える理論上の含意についても私見を述べることにする。

### 3. 3. 語形成論書・英文法書の記述

通時的観点と共時的観点の両方から、英語の語形成について最も詳しく論じた研究書の1つは Marchand (1969) である。しかしながら、この研究書においてさえも、-or の選択に関しては明確な基準は何も述べられていない。ただ、sailor は元々（後期中英語 (Late ME) において）は sailer であったとか、survivor は1503年に法律用語として新造されたとか、generator, originator などは、1550年から1750年の間では、ラテン語のアクセント規則に従って、後ろから2番目の音節に第1強勢があった、などの事実が個別に列挙されているだけである。よって、-or の付く語に関する歴史的な記述を詳しく見ていっても、-or 選択の条件をすっきりと浮かび上がらせることは難しそうである。

では、現代の英文法書として代表的なものに目を向けてみよう。先に紹介した Quirk et al. (1985) と並んで、語形成にも詳しい英文法書である Huddleston and Pullum (2002) には、次の記述が見られる。

「一般に -or は、instructor のようにラテン語起源の語や、activator のように接尾辞 -ate で終わる語や、mortgagor などのように専門用語（特に法律用語）や、author, doctor などのように拘束語基 (bound base) に付く場合に現れる。」(p. 1698から抄訳)

この最後の部分の author や doctor に関する指摘は、auth-, doct- といった部分が独立した語ではないということである。この特徴は、例えば、retail という動詞はあっても、tail という動詞はないので、retailer と tailor という違いが生じる、といったことの説明に利用でき、きわめて有用なものである。しかし、こうした author タイプの例は、-or まで含めて1語として扱われるわけであるから、「どのような『語』に -or が付加するのか」という本論で

の問いには、残念ながら答えを与えてくれるものではない。

それから、法律に関する用語などに -or が付加されやすいという指摘に関して付言すると、法律関係に限らず、sailor, editor, auditor, chancellor などのように、専門的職業を表す場合には -or が用いられる傾向が強い。この「専門性」という意味基準は確かに重要であるが、本論では、意味の特徴よりは、むしろ形式的な特徴を求めているので、意味的な考察は特には行わないことにする。

さて、上掲の指摘の中で問題となるのは、(Quirk et al. (1985) にも同趣旨のことがあったように) ラテン語起源の語には -or が選ばれやすいということである。語源的に見れば、なるほどそういう面はあろう。しかしながら、例えば consume, produce, transform などはラテン語起源の語であるが、-er が付加する。つまり、単にラテン語起源の語であるというだけでは、-or を取れるかどうかを決める基準としては不十分と言わざるをえないのである。

こうした中で注目したいのは、「-ate で終わる語に -or が付きやすい」という Huddleston and Pullum の指摘である。このような具体的な綴りによる基準であれば、その有効性の検証も行いやすい。そこで、次節以降では、どのような綴りで終わる語（すなわち、どのような形態的、あるいは、音素配列上の特徴を語末に持った語）に -or が付加しやすいのかを確かめるために、逆引き辞典を使った確認と、無意味語を用いたテストを行っていくことにする。

### 3. 4. 逆引き辞典による事実確認

英語の逆引き辞典の代表的なものの1つである Walker (1983) を用いて、-or の付いた語にはどのような特徴が見られるかを調べてみた。この辞典の pp. 350-6 には、-or で終わる名詞が581語挙げられている。その中から、語末部分の綴り字に依って、数量的に目立つものを示すと以下のようなになる（-or とその直前の綴り、実例、語数の順に示した）。

(1) a. -ator:	indicator, navigator, etc.	291
b. -ctor:	contractor, predictor, etc.	63
c. -itor:	inheritor, depositor, etc.	29
d. -utor:	contributor, executor, etc.	16
e. -essor:	successor, professor, etc.	15
f. -ntor:	grantor, inventor, etc.	14

g. -stor: investor, assistor, etc.

12

この調査の結果明らかになったことは、以下のようにまとめられる。

- i) -or が圧倒的に多く付いているのは indicate のように -ate で終わる語である (ちょうど半数の50%がこのタイプであった)。
- ii) その次に多いのは contract や select のように -ct で終わる語である。
- iii) そのほかの例は、-it や -ess で終わる語や、-ute, -ant, -est などのように超重音節 (superheavy syllable) で終わる語である。

### 3. 5. 無意味語テスト (Zovirax テスト)

辞書に挙げられた例を基にして -or の付く語の大体の傾向が分かったので、次に無意味語を用いたテストで、-er/-or の選択にどのくらい綴りや音素配列の情報が影響するのかを確認してみることにする。信頼のできる2名の英語のネイティブスピーカー (同僚の言語学者 Nathaniel Edwards 氏と John Phillips 氏) に、以下の (2) に挙げた例——アクセント記号も付した——と、それに -er と -or を付けた派生形を横に示して、「これらが新しい動詞だとして、その動作をする人を表す語を作るには、-er と -or のどちらを付けるのが自然ですか？」と質問し、妥当と思われる方を選んでもらった。<sup>2</sup>

- (2) zóvarix → zovarixor / zovarixer
- zóvirâte → zovirator / zovirater
- zóvirash → zovirashor / zovirasher
- zóviràst → zovirastor / zoviraster
- zóviràct → zoviractor / zoviracter
- zóviràsp → zoviraspor / zovirasper
- zóvirùte → zovirutor / zoviruter
- zóviròte → zovirotor / zoviroter
- zóvirìnt → zovirintor / zovirinter
- zóvirèct → zovirector / zovirecter
- zovírít → zoviritor / zoviriter
- zovíríss → zovirissor / zovirisser
- zovréss → zovressor / zovresser
- zóvít → zovitor / zoviter



まず、Edwards 氏の回答は「zovirate, zoviract, zovirect は -or を取ると思います。zovirote は zovirote としますが、もし機械を表したいならば -or を選ぶ気がします。zovress は zovressor となるかもしれませんが、後ろにアクセントがあるなら、presser みたいに zovresser としておきましょう。そのほかは -er を付けます」であった。また、この回答中に思い浮かべた類似語があるかどうか尋ねたところ、respirator, chiropractor, director, motor を思い浮かべたとのことであった。次に、Phillips 氏の回答は「zovirate, zoviract, zovirect, zovress は -or を付けるでしょう。zovirast, zovirute, zovirint は、-er と -or のどちらが付いてもよい気がします。そのほかの例には -er を選びます」であった。また、Phillips 氏の指摘で興味深かったのは、「zoviriss と zovit は、もし -or を付けるならば、zovirissor, zovitor という具合に強勢が移動する」ということであった。

### 3. 6. まとめ

-or が付くのはラテン語から借用した語に多いとするだけでは、あまりにも漠然とし過ぎている。「覚えるしかない」と言っているようなものである。本節では、-or が付きやすい例の語末部分の綴りを調べ、無意味語テストも行うことで、規則性を見出そうとした。その結果、-ate, -ct で終わる語には -or が選ばれる可能性がとて高く、-ess で終わる語にも -or が選ばれてよく、また、-ute, -nt, -st, -it で終わる語に -or が選ばれる場合もある、という具体的なことが分かった（なお、-ix, -asp などは、音節構造的には -ate や -act と同類であるが、-or を引き付ける力はなさそうである）。

## 4. 他の分析・提案について

西川 (2006: 170) は、「-or が付くものとして、基体の最後尾が [t] で終わる語彙がきわめて多く、ほかには、最後尾が [s], [l] で終わる場合もある」と述べている。この指摘は、本論と視点は近いが、最後尾の 1 音のみを抽出している点が問題である。例えば、[t] や [s] で終わるというだけならば、dissent や condense にも -or 付加を予測してしまうが、これらに付くのは -er である。やはり、「-ate や -ess で終わる」といった具合に接辞や音群の単位での捉え方でなくては、正しい一般化ができない。

高橋 (2009) は、「-or 形は -(at)ion 形から -(at)ion を切り取った上で -or を付ける。その証拠に、OED を見ると、-ation 名詞の初出年が動詞形のそれよりも古い」といったことを論じている。しかし、-er が付くものであ

でも、例えば production と produce のように、*OED* の初出年という意味で、名詞の方が動詞よりも先に使われたものがある。つまり、-or 型だからそれに関連する名詞が先に使用されたとは限らず、-er 型にもそういう組み合わせ例はある。また、例えば director の意味は、高橋説に従えば、“one who does direction” などになりそうだが、“one who directs”の方が普通は英英辞典に載っている（これも *OED* を参照）。つまり、～or の意味は動詞に基づいて定義されるので、形も動詞から作ったとする方がより自然であろう。

## 5. 今後の展望

本論の最後に、-er と -or が単なる綴り上の異形というわけではなく、異なる種類の接辞と見なせる可能性が強くあることを示すことにする。そしてさらに、-er の付く派生語と -or の付く派生語が形態論的に別のメカニズムによって作り出されているのか否か、という問題について考察してみたい。

まず、-er は強勢移動を全く引き起こさない（-er が付加した語の強勢型が変わることはない）ので、-er はいわゆる第Ⅱ類（class Ⅱ）接辞と分類される。一方、-or の場合には、強勢移動が起こりうる（execute ～ executor など）。また、Phillips 氏の指摘にあったように、無意味語の場合にも強勢移動が観察された。つまり、-or には第Ⅰ類（class Ⅰ）接辞としての特性が窺える。さらに、author などが存在することは、第Ⅱ類接辞は「語」のみに付くものに対して、第Ⅰ類接辞は「語よりも小さな形態素」に付くことができる、という基準にも整合している。例えば、réal → reality のように強勢移動を引き起こす典型的な第Ⅰ類接辞である -ity は、prob+ity の prob- のように、語よりも小さな要素に付加することができる。同様に、auth- などに付加できる -or は第Ⅰ類的である。さらに Edwards 氏によれば、例えば、player に第Ⅰ類接辞の -al を付加することは不可能だが、creator には -al を付けることが可能で、かつ、creatoral と強勢も移動する。このように、-or には第Ⅰ類接辞としての特徴がいくつも見られるのである。例えば竝木（1985: 39）は、-er について「綴りが -er でなく、-or や -ar であるものもある」と述べている。要するに -or は -er の単なる綴り上のヴァリエーション（異形態）としか考えていないわけだが、こういう済ませ方は早計であろう。

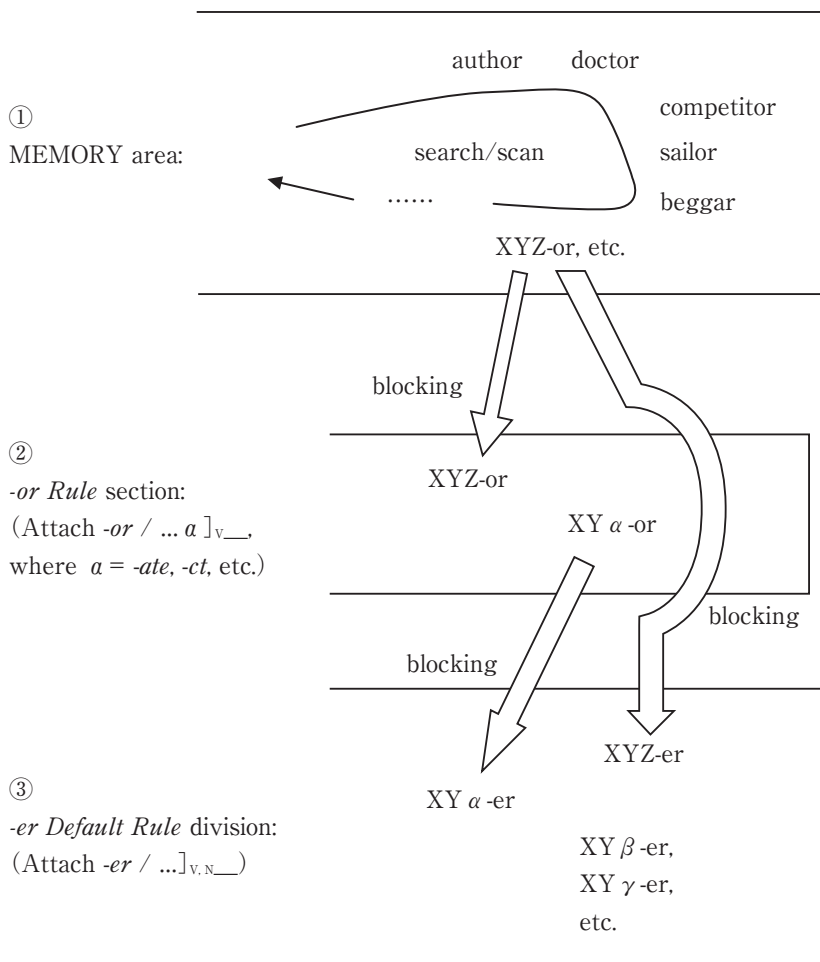
英語の屈折形態論においては、（特に動詞の場合、）規則変化形は規則で作られ、不規則変化形は記憶から引き出す、という二重メカニズム（dual mechanism）のモデルがしばしば主張されてきた（Pinker（1999）などを参照）。また、派生形態論においても、日本語の名詞接辞を分析した Hagiwara

et al. (1999) は、「さ」付加はデフォルト規則によって起こるが、「み」の付く語は記憶によって処理されることを論証し、二重メカニズムを提案した。

ところで、英語の不規則動詞は、辞書には300以上収載されていても、いくつかなの変化パターンのグループに分類（例えば、sell-sold-sold, tell-told-told は ABB 型など）できるので、本当に機械的記憶 (rote memory) を要するのは、be, go などの使用頻度が非常に高い一部のものである。また、日本語の「甘み」などの「み」が付く派生名詞は30例ほどであるので、暗記することはそれほど難しくはなかろう。ところが、本論で取り上げた -or の付く名詞形は、Walker の逆引き辞典に載っているだけでも600例近くあった。そして、新しい装置などが作られれば、その数はもっと増え続けるであろう。無意味語テストの際に、Edwards 氏が respirator などを思い浮かべたと答えていることから分かるように、何がしかの連想記憶 (associative memory) と類推が働くことは否めないであろう。また、author などは -or まで含めてそのまま綴りを覚えている可能性が高い。しかしながら、-ate や -ct などと終わる語の場合には、規則に基づく処理を行っているものと推察できる。まただからこそ、暗記しているはずのない無意味語においても、実在語の多少に対応するかのようになり、-or の選択がなされたのである。つまり、-or の付く語の生成には記憶と規則の両方が関わっていきそうである。

では最後に、ここまで述べてきたことを踏まえ、-or/-er の付加する語がどのように生成や取り出しをされるのかということ、以下に図説してみよう。まず、author, doctor, competitor, beggar などの語は、①の「記憶領域」の中に収められ、必要に応じて、そこから取り出しが行われているものと仮定する。<sup>3</sup> そして、この領域を走査もしくはスキャンした結果、仮に XYZ-or で表した語にヒットすれば、その語の存在が、規則によって XYZ に -or や -er を付加することを阻止 (blocking) するわけである。次の②の「-or 規則部門」では、「 $\alpha$  で終わる動詞に -or を付加せよ。ただし、 $\alpha$  は -ate や -ct など」という規則が働くことを表している。そして、この -or 規則によって -or が付加されれば、そのことによって、-er を規則的に付加することが阻止される。③の「-er デフォルト規則部」は、記憶領域にある XYZ-or などや、-or 規則によって派生された XY $\alpha$ -or 以外のもの（仮に XY $\beta$ , XY $\gamma$  等で表した動詞もしくは名詞）に付加して、規則的・生産的に派生語を作り出す作業をする箇所である。

(3) -er/-or 派生語生成のイメージ図



以上論じてきたように、-or には注目に値する特徴が（そして、不明な部分も）様々ある。よって、今後、より精緻で斬新な研究を行っていく価値と必要が十二分にある。

## 6. 付録

本稿では、-or がとりわけ -ate で終わる語に付く規則性を指摘した。そしてこのことは、辞書に載っているような語だけでなく、無意味語や、これから新たに作られる語にも当てはまるのである。以下の写真は、サンフランシスコ国際空港の土産物店で売っていたTシャツを写したものである。アーノルド・シュワルツェネッガーが現在その職にあるカリフォルニア州の「知事 (governor)」と、彼の出演作の“Terminator”とを混成させて作った“Governator”という文字が見える。このように、半分ジョークのような新造語においても、「-ate には -or」という規則がしっかりと生きていることは興味深い。



### 注

\*本稿は、太田 (2009) の議論を取り込みながら拡張・補足したものです。まずは、真夜中に電話をしてきて、携帯のバッテリーが切れるまで質問を続ける迷惑な豚児真理、および、夜中に電話をしても、「Boots に売ってますよ」などこちらの問い合わせに親切に答えてくれる畏友の服部範子さんに、愚考を書くきっかけを与えてくれたことを感謝します。また、関西音韻論研究会

(PAIK) の例会 (2009年7月4日), および, 山口大学英語学研究会 (2009年10月9日) において, 本論の粗筋を発表し, 参加メンバーの方々から貴重なコメントをいただくことができました。ここに記して, 彼・彼女らに感謝申し上げます。なお, 本稿は, 科学研究費補助金 (基盤研究 (C), 課題番号 20520441) の助成を受けて行った研究成果の一部を含んでいます。

1. この逸話の中の英文部分は, 齊藤 (2000) から引用した。
2. これらの無意味語は, Zovirax という薬 (グラクソ・スミスクライン社で開発された抗ウイルス剤) の名前を基にして作った。英語の实在語らしさをなるべく感じさせないように, ロシア語のような響きで始まるこの語を選んだ。
3. competitor は compete に -or が付いたのではなくて, むしろ, 形容詞の competitive と -or が一緒になった特殊例と思われる。また, -ar が付くものは, beggar, liar といったほんの数例しかないので, 単純に暗記しているものと思われる。

#### 参考文献

- Hagiwara, Hiroko, Yoko Sugioka, Takane Ito, Mitsuru Kawamura and Jun-ichi Shiota (1999) "Neurolinguistic Evidence for Rule-based Nominal Suffixation," *Language* 75, 739-763.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Marchand, Hans (1969<sup>2</sup> [1960]) *The Category and Types of Present-Day English Word-Formation: A Synchronic-Diachronic Approach*, Beck, München.
- 竝木崇康 (1985) 『語形成』(新英文法選書2) 大修館.
- 西川盛雄 (2006) 『英語接辞研究』 開拓社.
- 太田聡 (2009) 「『～する人 [もの]』を表す接尾辞 -or について」『近代英語研究』25, 127-133.
- Pinker, Steven (1999) *Words and Rules: The Ingredients of Language*, Basic Books, New York.

齊藤兆史 (2000) 『英語達人列伝』 (中公新書1533) 中央公論新社.

高橋勝忠 (2009) 『派生形態論』 英宝社 .

Walker, J. (1983 [1924]) *The Rhyming Dictionary of the English Language*,  
Revised and Enlarged Edition with Supplement, Routledge & Kegan  
Paul, London.